

卒業|GRADUATION

不破純

工业学院图书馆

藏书章

Jun Fuw

Graduation

卒業—Graduation—



1990年10月5日 初版発行
1990年10月30日 再版発行

著 者／不破 純

発行者／角川春樹

発行所／株式会社角川書店

東京都千代田区富士見2-13 〒102 振替東京3-195208

T E L 営業03-817-8521 編集03-817-8451

印刷所／暁印刷株式会社

製本所／株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan ISBN4-04-872597-1 C0093

卒業/GRADUATION

壊れた多角錐をもう一度

不破 純

装丁・写真

田島照久

Prologue

“夢の断片を組み立てる”

それが朝、自我が覚醒してすぐに、ベッドの温もりの片隅で、僕にする、今日、最初の行為。

顔は枕に埋めずめたまま。

四時三十分に合わせておいた目覚まし時計の居場所を手探りで捜し当て、約五分前の今、頭を叩いて、止める。

もう、目覚まし時計の発狂じみた音に、脳の中樞を打ちつけられることなく、眠りの深淵からすみやかに、脱け出せるようになった。

吐息をつきながら、体を反転させる。仰向けになる。

腹筋に力を入れて、上体を起き上がらす。極限の伸びをする。

しばたかせた目を、床に落とす。

そこから一筋だけ差し込んで、曙光しやうこうをなぞる。

微塵みじんすらキラキラと、輝き舞っている。

暗く外界を遮断した窓の先、今日の空合いを透視しようとする。

一日が胸に、止めどなく溢あふれ出す。

ベッドのへりに腰掛けながら、ランニング・ウェアに着替える。

“今日はまた、どんな表情かおの自分を見つけられるんだろう”

暗闇くらやみを残したまま、部屋から出る。



家族を起こさぬよう気を配り、洗面所に立つ。

鏡の中の自分と目が合い、短く照れ笑い。

顔を洗う。歯を磨く。両手いっぱい溜ためた水を、もう一度頬ほおにぶつける。

冷たい水が、弾け飛ぶ。

瞬く。息を吹く。顔を拭う——しかし完璧には、ない。



玄関に足を運ぶ。

靴はつつかけるだけ。

鍵を開ける。

その音は厳肅に、張りつめた空気を撃つ。一日の始まりを、告げる。

ドアを開け放し、表に出る。

地面を爪先立ってピョンピョン飛び跳ね、靴をしっかりと履く。

視界の展けた、マンホールの上に立つ。

生まれたての酸素を、胸にする。

眠りの余韻と、頬に残しておいたとおきの水滴とを、凜とした朝の息吹

きが、快く、拭い去る。

視線は螺旋を描いて、空へと向けられる。

朝焼けの空。

初めて瞳を彩られたのは、いつだったろう？

そのとき僕は、

「夕焼けみたい」

確かそう言って、誰かに笑われた気がする。

それが誰だったのか回顧すると共に、軽く体操をする。

闊歩して、冷然なタクシーと憤然なトラックとが断続的にしか過らない、通りに出る。

まだ街は眠りに落ちている。まだ街灯は灯ってる。月は光ってる。

信号機だけが早起きしている。

それを見て少し、緊張する。

左の膝をゆっくりと落とし、屈み込む。ほどけた右の靴紐を、固く結ぶ。

その右足で軽快に第一歩アスファルト蹴^けりつけて、昨日とは違う朝靄^{もや}の漂う街中を、僕は夢握りしめて、今日も、ひた、走る。

Chapter 1

先刻^{きつ}とはうって変わって、通りは色とりどり、種々さまざまな車に埋めつくされている。

修正のきかない日常に順行し始めた何台もの車が、赤信号の規律のもと、不揃^{ずら}いな隊列をなしている。

俺^{おれ}は単車のハンドルを右、左、即切り返し、その間隙^{かんげき}を器用に縫い上げていく。

ブレーキを握る。横に引かれた白線を少しばかり踏みつける。赤信号を見上げる。

やっこのこと、先^{ボール・ボジション}頭^とを獲^とった。

目の前の横断歩道を、役立たずな一日の準備を携えた人達が、今日の空とは裏腹な曇った表情で、追い立てられている。

見つめ合わない信号同士がともに赤く点灯したとき、一人だけ無理な横断。一瞬の空気の静寂。

俺は肩に力を入れる。アクセルを空ぶかしする。ジリジリとフライングしそうな紺色の乗用車、横目に見て。

シグナル、赤→青。

俺はアクセルを開く。クラッチをつなぐ。走り出す。

のけぞちちまった上半身、一瞬に被せる。

灰色のアスファルトと連なる白い車線だけが目に飛び込んでくる。

俺はもう一絞り、アクセルを開く。

風が俺の学生服を激しく靡かせる。風が破れていく。風が流れていく。

幾つかの点を結んだ満員電車の線上を、ぼんやりと逸せず、単調に往反していた日々が、俺の体にぶつかり、破れていった。

行き止りの退屈にたわんだ生活を変えたいくせに、

枯渴した風の中、

自暴自棄の刺激を代償にしては走り明かした日々が破れていった。

一緒くたに行動を押しなべられた生活を塗り直したいくせに、

排他的な街の中、

振れた指針に身を預けては騒ぎ明かした日々が破れていった。

自堕落すらおめおめと容認させられてしまう生活を断ち切りたいくせに、

虚飾の光の中、

束の間の媚薬に酔いしれては踊り明かした日々が破れていった。

凝縮された時間を空費する生活を止めたいくせに、

だらけた群れの中、

非生産的な言葉を冷笑しては語り明かした日々が破れていった。

義務だけが堆く積み上げられた生活を片付けたいくせに、

分厚い闇の中、